令和３年度　秋の公開

総合的な学習の時間学習指導案

指　導　者　　北信教育事務所　指導主事　甘利　秀也　先生
共同研究者　　信州大学学術研究院教育学系　教授　廣内　大助　先生
日　　時　　令和３年11月９日（火）
授業学級　　２年Ｅ組（41名）
授業会場　　武道場
単　元　名　　「私たちが考える『災害に負けないまち』」
授　業　者　　中村　和孝

Ⅰ 本校全体の研究
1　目指す生徒の姿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・総合１
2　全校研究テーマ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・総合１
3　研究の重点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・総合１
4　各教科等での育成を目指す資質・能力と各教科等の研究テーマ・・総合２
Ⅱ 総合的な学習の時間の研究
1　総合的な学習の時間の研究テーマ・・・・・・・・・・・・・・・・総合３
2　領域としての全校研究テーマの受け止め・・・・・・・・・・・・・総合３
3　研究内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・総合３
Ⅲ 単元の指導計画
1　単元名・学年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・総合４
2　単元の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・総合４
3　単元の評価規準・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・総合５
4　総合的な学習の時間係として、全校研究テーマに迫るための仮説・総合５
5　単元に寄せた教材化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・総合５
6　単元展開・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・総合９
Ⅳ 資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・総合 11

信州大学教育学部附属長野中学校　　総合的な学習の時間係

研究者　　中村　和孝　　武井　正樹
　　小林　輝紀　　宮本　常徳

Ⅰ　本校全体の研究

１　目指す生徒の姿

学びを拓いていく生徒

２　全校研究テーマ

学びの本質に迫る学習の在り方

３　研究の重点

(1)　問題発見・解決の過程において、各教科等の「見方・考え方」を働かせることができるようにする。（重点１）
(2)　学んでいることや学んだことの意味や価値を自覚することができるようにする。（重点２）

昨年度までの成果と課題から、本年度は、目指す生徒の姿を「学びを拓いていく生徒」とし、研究を進めていくこととした。「学びを拓いていく生徒」とは、①「各教科等の資質・能力を身に付けていく生徒」と②「①を踏まえて、身に付けた資質・能力を他に生かしたり、新たに見いだした課題を解決しようとしたりしながら学び続けていく生徒」と、捉えている。

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説の第１章総説には、「これからの時代を生きる生徒は、予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要である」と示されている。

このような力を育成するためには、中学校において、生徒が各教科等の「見方・考え方」を働かせて、各教科等の資質・能力の育成につなげていくことが求められている。「見方・考え方」そのものは資質・能力に含まれるものではないが、各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、各教科等の学習と社会とをつなぐものである。また、本校では、学習の基盤となる資質・能力のうち、「問題発見・解決能力」が、生徒の生涯にわたる学びの基盤となるものと考え、研究の重点１を「問題発見・解決の過程において、各教科等の『見方・考え方』を働かせることができるようにする」と据えた。

各教科等で身に付けた資質・能力を他に生かしたり、新たに見いだした課題を解決しようとしたりしながら学び続けていくことができるようにするためには、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解するなど、生徒が各教科等の学習の有用性を認識していく必要がある。そこで、研究の重点２を「学んでいることや学んだことの意味や価値を自覚することができるようにする」と据えた。「学んだこと」だけではなく、「学んでいること」を付け加えたのは、単元や題材の学習において、「何のためにこの学習を行っているのか、そこにはどのようなおもしろさや社会とのつながりがあるのか」などを、生徒が自覚することで、学ぶことに興味や関心をもち、粘り強く取り組む中で、自己の学習を振り返って、次につなげるなど、生涯にわたって学び続けることにつながるのではないかと考えたためである。

各教科等の「見方・考え方」を働かせて、資質・能力を身に付けていくことが「各教科等の本質」であるとするならば、各教科等の枠を超えて、自ら「見方・考え方」を働かせて、物事を問い続けたり、追究したりして学び続けていくことを「学びの本質」と捉える。そこで、「学びを拓いていく生徒」を育成するために、全校研究テーマを「学びの本質に迫る学習の在り方」と据え、研究を進めていくこととした。

４ 各教科等での育成を目指す資質・能力と各教科等の研究テーマ

各教科等の資質・能力を育成するため、本年度の各教科等の研究テーマを下記のように決め出した。

各教科等	各教科等で育成を目指す資質・能力	各教科等の研究テーマ
国語	国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力	文章を読んで理解したことなどに基づいて、自分の考えを形成する力を高める学習の在り方
社会	広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎	社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を多面的・多角的に考察する力を高める学習の在り方
数学	数学的に考える資質・能力	数学を活用して事象を論理的に考察したり、数量や図形などの性質を見いだし統合的・発展的に考察したりする力を高める学習の在り方
理科	自然の事物・現象を科学的に探究するために必要な資質・能力	観察、実験の結果を分析して、解釈する力を高める学習の在り方
音楽	生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力	音楽表現を創意工夫する力を高める学習の在り方
美術	生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力	主題を基に、発想し構想する力を高める学習の在り方
保健体育	心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力	運動が有する特性や魅力に応じて、その楽しさや喜びを味わおうとする力を高める学習の在り方
技術・家庭	よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築に向けて、生活を工夫し創造する資質・能力	(技術分野) 社会や生活課題について多面的に検討し、最適な解決策を考える力を高める学習の在り方 (家庭分野)生活事象を多角的に捉え、よりよい生活を営むために工夫する力を高める学習の在り方
英語	簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力	事実や考え、気持ちなどを伝え合う力を高める学習の在り方
道徳	よりよく生きるための基盤となる道徳性	自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、道徳的心情を育むための学習の在り方
総合	よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力	自ら課題を設定する力を高める学習の在り方
特別活動	様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して身に付ける資質・能力	学校生活をよりよくするための課題を見いだし、解決する力を高める学習の在り方

Ⅱ 総合的な学習の時間の研究

1 総合的な学習の時間の研究テーマ

自ら課題を設定する力を高める学習の在り方

2 領域としての全校研究テーマの受け止め

「関心のある社会問題を調査しよう」（令和２年 10 月・１年）では、持続可能な社会を実現するための問題を自己の生活との関わりで捉える学習を構想した。そこでは、実地調査から得た情報を目的に合わせた方法で整理し、そこから分かったことを基に自分の考えをまとめる展開を位置付けた。

Ｓ生は、海洋プラスチック問題について調べる中で、長野県の湖で海洋プラスチック問題の原因となるマイクロプラスチックが発見されたことに関心をもち、「身近な地域にも海洋プラスチック問題の原因があるのだろうか。」と課題を設定した。課題解決のために街中と河原のごみ調査を行ったＳ生は、街中と河原で拾ったごみの量と種類を比較し、それぞれのごみの量に対するプラスチックごみが占める割合を円グラフを用いて整理した。そして、プラスチックごみの割合が、街中より河原の方が何倍も多いことを見いだした。その後、自分の考えをまとめる場面においてＳ生は、予想以上にプラスチックごみが河原に落ちていた事実から、海洋プラスチック問題の原因が身近な地域にもあると考え、「プラスチックごみを減らすために私ができることに取り組みたい。」と課題意識を高めた。そして、「プラスチックごみを減らすために、生活の中でできることを取り組もう。」と、海洋プラスチック問題を自己の生活に関わらせて捉えた新たな課題を設定し、課題の解決に取り組むことができた。このＳ生のような姿を、「探究的な見方・考え方」を働かせ、自ら課題を設定する力を高めた姿と捉える。

単元の終末、単元の学習を終えて、分かったことや考えたことを振り返る場を位置付けた。Ｓ生は、「私たちの身近な河川にも海洋プラスチック問題の原因となるプラスチックごみが大量にあって驚いた。海洋プラスチック問題を発生させないためにも自分にできることを考えて実行していきたい。」とまとめた。このＳ生の姿を、学習した内容をこれからの自己の生き方につなげて考えることができた姿と捉える。一方で、単元の学習を通して、海洋プラスチック問題に対する課題が「原因」から「自分にできる取組」とへと変化したことに、学習過程のどのような活動や考え方が役立ったのかという方法面を自覚するまでには至っていないと捉えることもできる。このことから、単元を通して、課題が変化したことに、学習過程のどのような活動や考え方が役立ったのかを振り返る場を位置付けることで、内容面と方法面の両面から学んだことの意味や価値を自覚することができるのではないかと考える。このような学習を積み重ねていくことで、総合的な学習の時間の研究テーマ、さらには全校研究テーマを具現し、「学びを拓いていく生徒」に迫ることができると考え、本研究を構想する。

3 研究内容

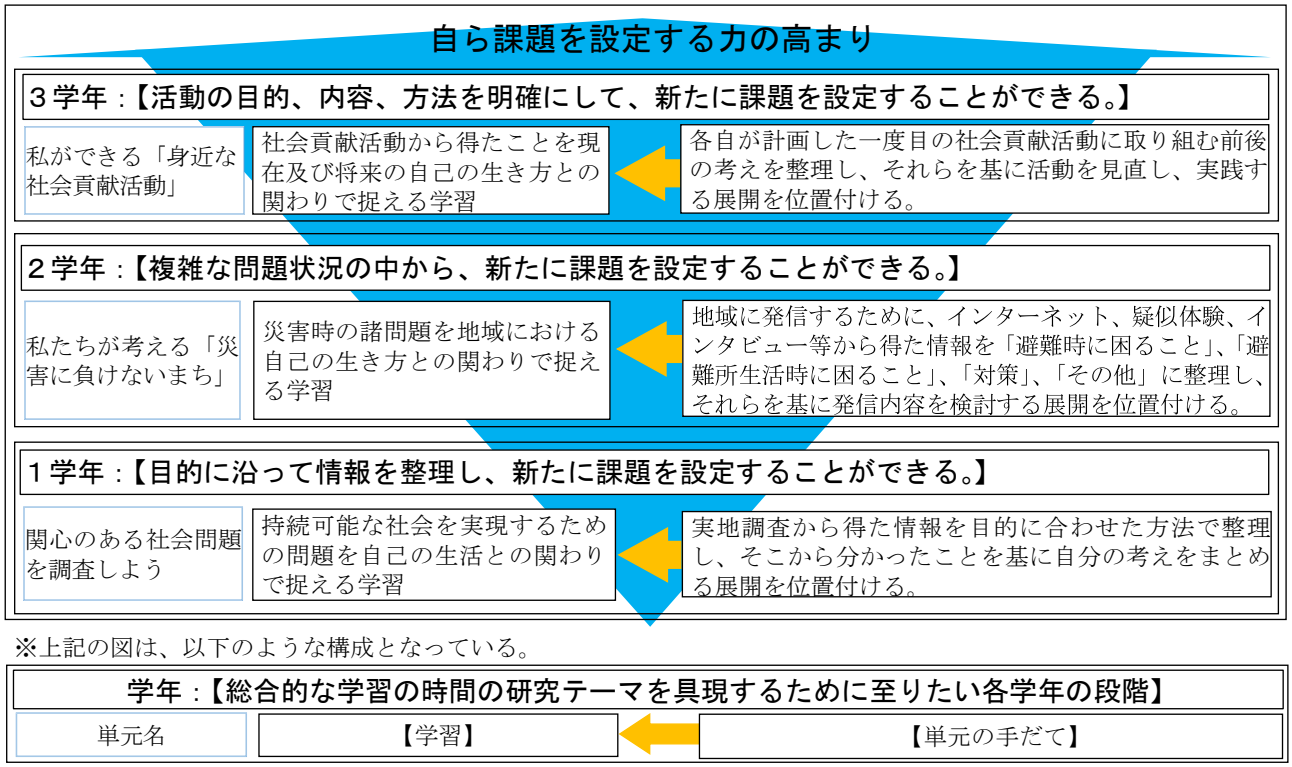
本校では、「自ら課題を設定する力」を、「生徒が実社会や実生活に広がる問題と向き合う中で、自分で取り組むべき課題を設定すること」と捉えている。これを具現するためには、生徒の「知りたい」、「調査したい」、「発信したい」といった課題意識が単元の中で連続発展してくことが欠かせないと考える。

そのために、探究のプロセスの「課題の設定」の場面における本校生徒の実態と中学校学習指導要領の総合的な学習の時間で育成すべき資質・能力から、総合的な学習の時間の研究テーマを具現するために至りたい各学年の段階を決め出し、３年間の構想図を作成した（**図１**）。そこでは、講演を聞く、現地で調査する、実物に触れる、人と関わるといった「人・もの・こと」と直接関わる場を単元の始めや展開の中に設定する。「人・も

の・こと」と直接関わった生徒は、それまで抱いていた予想や理想と実際に関わって感じた現実との比較から、「ずれ」や「隔たり」、対象への「憧れ」や「可能性」を感じ、「このような『ずれ』が生まれる理由を知りたい。」、「この『隔たり』を埋めるために調べたい。」、「『憧れ』の人のような生き方に近付きたい。」、「私たちにも地域貢献ができる『可能性』があるのかもしれない。」と課題意識を高めていくことができると考える。

このようにして、「人・もの・こと」と直接関わり、課題意識を連続発展させていくことで、生徒は、解決への意欲を高め、具体的な見通しをもった課題を自分で設定することができると考える。そして、このことが、探究のプロセスを充実させたり、新たな探究のプロセスを生み出したりするなど、「課題を解決したい」、「他者に伝えたい」といった、探究的な学習活動の原動力となると考える。さらに、これは、中学校学習指導要領（平成29年度告示）解説総合的な学習の時間編第１章総説「改定の趣旨」において十分ではないと示されている、「探究のプロセス中の『整理・分析』、『まとめ・表現』に対する取組」の改善、向上へもつながっていくと考える。

以上のことから、「自ら課題を設定する力」を高めることを目指し、生徒が単元の始めや展開の中で、「ずれ」、「隔たり」、「憧れ」、「可能性」を感じることができるような学習の在り方を研究していく。



※上記の図は、以下のような構成となっている。

図１　自ら課題を設定する力を高めるための３年間の構想の一部

Ⅲ　単元の指導計画

１　単元名・学年　「私たちが考える『災害に負けないまち』」・２年

２　単元の目標

災害時に関する調査を通して、誰もが安心して避難や避難所生活ができるためには、地域に住む様々な立場の人の特徴や生活を理解し、対象者が困ることや要望を基に、災害に負けないまちの在り方を地域に発信するとともに、災害時の諸問題を地域における自己の生き方との関わりで捉えることができる。

※「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料　中学校　総合的な学習の時間」によると、総合的な学習の時間の目標は、「内容のまとまり」を基に、総括的に目標を示すとともに、資質・能力の三つの柱を構造的に配列し、単元の目標としているため、本校他教科の学習指導案の単元の目標とは異なる表記をしている。

３ 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
知① 災害に負けないまちの実現には、そこに存在する多様な問題に気付き、解決に向けて取り組むことが必要であることを理解している。 知② 追究してきたことが地域における自己の生き方に関わっていることに気付いている。 技 対象者が困ることとその対策に関する調査を、適切な方法で実施している。	思① 資料や調査で収集した情報から課題を見いだしている。 思② 必要な情報を明確にし、多様な方法の中から効果的な方法を選択している。 思③ 収集した異なる情報を整理し、それらを関連付けて解決に向けて考えている。 思④ 避難や避難所生活に関する調査結果を根拠に、自分の考えを表現している。	態① 避難や避難所生活における問題について、他者の意見を受け入れながら解決の見通しを立てようとしている。 態② 課題の解決に向けて、他者の調査内容を生かしながら、協働して取り組もうとしている。 態③ 地域住民としての自覚を高め、誰もが安心して避難や避難所生活ができる方法を考えようとしている。

４ 総合的な学習の時間係として、全校研究テーマに迫るための仮説

(1) 重点１に関わる仮説

・地域に発信するために、インターネット、疑似体験、インタビュー等から得た情報を「避難時に困ること」、「避難所生活時に困ること」、「対策」、「その他」に整理し、それらを基に発信内容を検討する展開を位置付ける。このようにすることで、「探究的な見方・考え方」を働かせ、自ら課題を設定することができ、課題の解決に取り組み、災害時の諸問題を地域における自己の生き方との関わりで捉えることにつながる。(単元)

・整理した情報を基に、「目的」に沿った発信内容を検討する活動を位置付ける。このようにすることで、発信に向けた取組の見通しをもつことができる。(本時)

(2) 重点２に関わる仮説

・単元の終末、学習した内容を振り返り、「これからの自分」という視点で考えをまとめたり、単元を通して課題を更新してきたことについて、どのような活動や考え方が役立ったのかを振り返ったりする場を位置付ける。このようにすることで、地域における自己の生き方や、新たな課題を自分の力で設定するために必要なことなど、内容面と方法面から学んだことの意味や価値を自覚することができる。

５ 単元に寄せた教材化

本単元の探究課題である「災害に負けないまちづくりとその取組」について、避難や避難所生活に関わる内容を扱う価値は下記の二つである。

一つ目は、生徒が地域社会との関わりを感じながら探究課題を追究できる点である。避難や避難所生活は、誰にでも、どの地域でも直面する可能性がある。災害に負けないまちの実現に向けて生徒は、避難所運営をされた方の話を聞いたり、避難や避難所生活に対して、地域住民が感じる不安を調査したりする。そして、調査したことを基に検討した内容を地域に発信する中で、本校が立地する地域以外から通学する生徒も、「自分の住んでいる地域にはどのような人が住んでいるのか」、「災害時に自分ができることはどのようなことか」と地域社会を身近に感じながら学習活動を進めることができると考える。

二つ目は、横断的・総合的な学習としての性格をもつ点である。本単元で取り上げる、「視覚障害者」、「聴覚障害者」、「乳幼児・妊産婦」、「高齢者」、「外国人」が災害時に困ることは一つに限らない。例えば、「視覚障害者」であれば、「避難の際、被害状況が分からず、避難場所に一人で移動することができない。」、「避難所では、音声による情報の収集ができずに困る。」などが挙げられる。このようにして、災害時に困ることは複数あり、それらの解決策には答えがなく、各教科等の枠組みに当てはめることは困難である。よって、生徒は、課題の解決に向けて、「各教科等における見方・考え方」を総合的に働かせながら、問題の解決に取り組むことができると考える。

(1)　地域に発信するために、インターネット、疑似体験、インタビュー等から得た情報を「避難時に困ること」、「避難所生活時に困ること」、「対策」、「その他」に整理し、それらを基に発信内容を検討する展開を位置付ける

第１時、教師は、令和元年 10 月に発生した台風 19 号などの災害による被害の様子を紹介する。生徒は、身近な地域が甚大な被害に見舞われた映像を視聴し、災害が他人事ではないことを感じるだろう。そのような生徒に対し、教師は、災害時に起こり得る二者択一の状況に対して、自分ならどのように行動するかを友と共有する場を設定する（**図２**）。生徒は、人によって避難時の判断基準が異なることや正しい情報を知り、自己の防災意識を高めることが必要だと感じるだろう。

第２時、教師は、災害時の避難先の一つである避難所について考える場を設ける。生徒は、避難所とはどのような場所なのかや、避難所の運営は地域住民が中心となって行うことを知る。そこで、教師は避難所の運営時に起こり得る二者択一の状況について、運営者の立場に立って考える場を設定する（**図３**）。活動を通して生徒は、安全性、平等性などを考慮した判断が求められる避難所の運営の難しさや他者のことを考えて運営することの大切さを感じるだろう。そして、自分が避難者や避難所運営者として選択主になる「可能性」を感じながら第１、２時の活動に取り組むことで、実際の災害時では、どのようにして判断しているのだろうと、課題意識をもち始めるだろう。

◇家にいると・・・
祖母、両親、私、生後３ヶ月の妹の５人家族。私にはぜんそくがある。
激しい雨が降り続いている。今、洪水の危険があるとして集落に「避難指示」が出たことを防災無線で知った。しかし、現在午後10時。今すぐ、避難所へ避難を始める？
避難する　／　避難しない

図２　避難時に起こり得る状況

◇あなたは避難所運営者
大雨が連日続き、「避難指示」により河川の氾濫の危険を感じ、続々と避難所に人が集まってくる。その中に、ペットを連れてくる家族も複数見られる。
「ペットも家族の一員、受け入れをお願いしたい。」という要望があった。どうしますか。
受け入れる　／　受け入れない

図３　避難所で起こり得る状況

第３時、教師は、地元の災害復興対策企画委員会の方の講演会を設定する。台風 19 号で被災した直後の様子や復興に向けた取組について聞く中で、生徒は災害を自分事として捉え始め、自分の地域が被災したらどのようになるか考えるだろう。教師は、講演会の中にあった、「災害に負けないまちをつくることが大切だ。」という言葉から、「どうすれば誰もが安心して避難をしたり、避難所生活をしたりすることができるまちをつくることができるか調べ、地域に発信したい。」と考える生徒の意見を取り上げ、「誰もが安心して避難や避難所生活ができる『災害に負けないまち』の実現に向けて調査し、地域へ発信しよう。」を単元の目標として設定する。

図４　避難所運営シミュレーション

第４～５時、講演会で、地域のつながりを深めるためには、地域からどのような人が避難してくるのかを知ることが必要であることを聞いた生徒に、教師は、５人１組で避難所運営シミュレーション（**図４**）を行う場を設定する。生徒は、性別、年齢、家族構成、国籍など、異なる立場の人が避難してくることに戸惑いながら、避難者の配置や対応を考える。振り返りの場面で教師は、同じ避難者でも避難所内の配置の仕方が班によって異なることを指摘し、そのような配置にした理由を問う。生徒は、「高齢者は、歩くことが困難かもしれないからトイレの近くに配置した。」などと、高齢者が安心して生活できるように、困難に感じるであろうことを理由に配置したことを話すだろう。さらに教師は、配置がうまくできなかった避難者はいないか問う。生徒は、「盲導犬は、『視覚障害者』と一緒に体育館に入れていいのか困った。」と、自分たちの経験や知識のみによる判断と実際に当事者が求める配置との間には「隔たり」があるのではないかと感じ、「災害時に困ることが多い方の話を聞いてみたい。」と課題意識を高めるだろう。そ

こで、教師は、このような意見を取り上げ、高齢者や障害者といった災害時要支援者が災害時に困ることなどについて調査することを全体で共有する。

第６時、教師は、東日本大震災における災害時要支援者の被害状況の資料を提示する（**総合 11 資料１**）。生徒は、資料から被害を受けた 70%以上が高齢者であることや、障害者の被害の割合が通常の２倍近くまで高くなっていることを読み取る。そして、予想していた割合と現状との間の「ずれ」を感じ、身体等の不自由さから避難時に自分の力で避難できないことがこのような現状につながっているのではないかと自分なりに分析するだろう。さらに、「自分の地域でも災害が起これば同様の結果となる可能性があるのではないか。」と、この現状を自身の地域と置き換えて考え、「災害時要支援者のことや災害時要支援者が困ることや不安に感じることを知ることが必要ではないか。」や「災害時要支援者の立場に立って体験してみることで分かることがあるのではないか。」と考える生徒の意見を取り上げ、全体で共有する。その後、生徒は、「視覚障害者」、「聴覚障害者」、「乳幼児・妊産婦」、「高齢者」、「外国人」から追究する対象者を決め、「『対象者』は、災害時に、どのようなことに困ったり、不安を感じたりするのか調査しよう。」などと課題を設定する。そして、「視覚障害者」について追究する班であれば、インターネットで調べたり、目隠しをして疑似体験をしたり、盲学校の職員や生徒にインタビューをしたりすればよさそうだと解決の見通しをもち、追究を進めていくだろう。

第７～９時、生徒は、計画に沿って情報を収集する。インターネットを用いた調査では、対象者に関する情報の他に、実際に起きた問題とそれに対する自治体の対策に関する情報を収集するだろう。疑似体験を行う生徒は、何気ない行動や生活の中に不自由さがあることに気付くだろう。対象者や関係者への調査では、対象者が災害時に困ることが予想以上にあることや「このようにしてほしい。」という要望も知るだろう。このように情報を収集する中で、さらに必要な情報は何かを明らかにし、疑似体験に臨む生徒であれば、「ブラインドウォークを通して、「視覚障害者」がどのようなことに困るかを感じ、誘導の仕方や声の掛け方を考えよう。」などと、新たな課題を設定していくだろう。

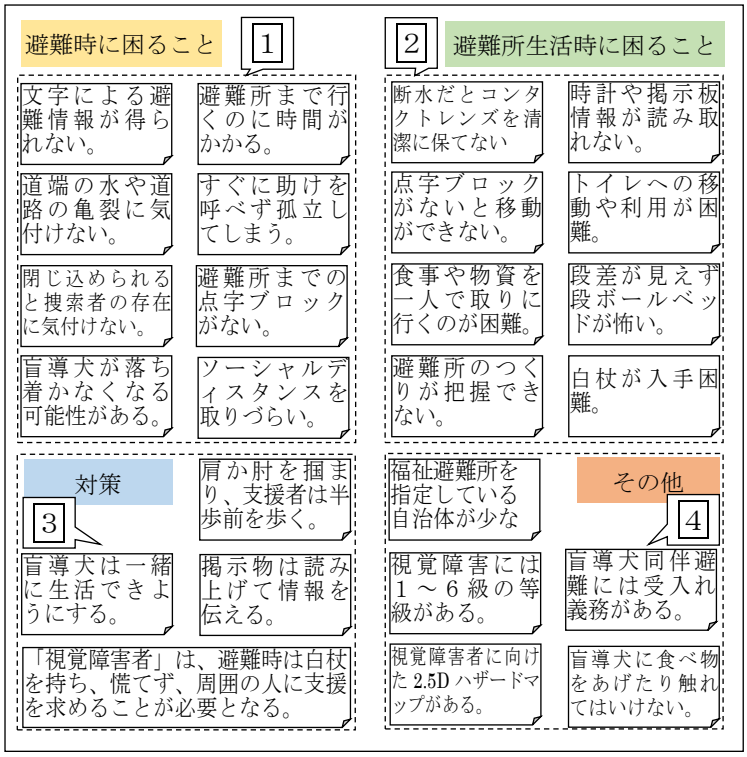


図５　視覚障害者に関わる情報をまとめた模造紙

第 10～11 時、教師は、収集した情報を「避難時に困ること」（**図５**1）、「避難所生活時に困ること」（**図５**2）、「対策」（**図５**3）「その他」（**図５**4）に整理するように促す。情報を整理した生徒は、対象者が災害時に困ることが予想以上に多いことに気付くとともに、「避難時に困ること」、「避難所生活時に困ること」の内容と、「対策」の内容とを照らし合わせ、困ることに対してどのような対策が行われているのか、また、対策が成されていないことはないかを分析していく。この中で、地域に発信するための情報がさらに必要だと考える生徒は、再度情報を収集していくだろう。そして、調べた情報を地域の方に伝えることが、対象者への適切な配慮や手助けにつながると考えるだろう。そ

こで、教師は、社会福祉協議会の職員からの「回覧板であれば、地域のあらゆる年代の方に情報を発信できるのではないか。」というメッセージを伝える。生徒は、回覧板を通じて地域に発信することが、地域住民同士のつながりを深めることに役立つのではないかと「可能性」を感じ、整理した情報を発信したいと課題意識を高めるだろう。

第 12 時（本時）、教師は、単元の目標にある「誰もが安心して避難や避難所生活ができる『災害に負けないまち』の実現」に触れて、発信への意欲を高めている生徒の振り返りから、「整理した内容を基に、『目的』に沿った発信内容を検討しよう。」と授業の目標を確認する。生徒は、目的を実現するために、整理した情報からどの内容を載せたらよいかを選び出し、回覧板に挟み込む資料に見立てたワークシートにまとめていく。「視覚障害者」を対象とする班で、「視覚障害者」を誘導する方法を伝えることが重要だと考えた場合、方法のみでは災害時の支援にはつながりにくいと考え、「視覚障害者」が避難時や避難所生活時に困ることや視覚障害に関する情報を関連付けながら伝えようとするだろう。また、「視覚障害者」の方ができる対策も伝えるべきだと考えた場合、一般的な防災倉庫の備えが、必ずしも十分ではないという情報を根拠に、「視覚障害者」の方が備えておくべきものに関する情報を載せようとするだろう。このようにして、生徒は、整理した情報を基に、伝える相手を明らかにし、情報を順序付けたり、分類したりしながら、回覧板に載せる内容をワークシートに構造的に配置していくだろう。そして「一人でも多くの人が『視覚障害者』へサポートができるように、適切な誘導方法や声掛けの仕方を発信していきたい。」と新たに取り組むべき課題を具体的にもつだろう。

第 13～16 時、生徒は、各自が設定した課題に取り組む。生徒は、課題に関する自治体の取組やマニュアルを調べ、そこから必要な情報を選び、資料を作成していく。

第 17 時、教師は、第４時に行った避難所運営シミュレーションを再び行う場を設ける。避難所で対象者が困ることやその対策を追究した生徒は、それらを基に、配置を考えていく。そして、第４時の配置と見比べることで、学んだこと価値を自覚するだろう。

このような単元の展開を位置付けることで、生徒は、「探究的な見方・考え方」を働かせ、避難や避難所の諸問題を地域における自己の生き方との関わりで捉えることができるのではないかと考えた。

(2)　単元の終末、学習した内容を振り返り、「これからの自分」という視点で考えをまとめたり、単元を通して、課題を更新してきたことについて、どのような活動や考え方が役立ったのかを振り返ったりする場を位置付ける

教師は、単元の終末、学習した内容を振り返り、「これからの自分」という視点で考えをまとめるように促す。生徒は、自分の地域に目を向け、地域に住んでいる人のことを知りたいと願い、普段から地域の人たちと連携を大切にしたいと考えるだろう。さらに、将来自分が生活する地域で、万が一災害が起きた時には、避難や避難所運営を支援する一員として、誰一人として取り残さず、地域全員で協力して、災害を乗り越えていけるようになりたいなどと、地域における自己の生き方について考えるだろう。

その後、教師は、単元を通して、課題を更新してきたことに、どのような活動や考え方が役立ったのかを振り返るように促す。生徒は、講演会で話を聞いたことや、実際の資料や直接対象者や関係者と関わって情報を収集した活動を挙げるだろう。そして、その人の思いや考えを直接聞くことで、漠然と捉えていた地域住民や災害時に困ることが具体的に想像でき、それに対して、自分にできることはないかと考えることで、取り組むべき新たな課題を設定することができたと考えをまとめるだろう。

このようにすることで、地域における自己の生き方や、新たな課題を自分の力で設定するために必要なことなど、内容面と方法面の両面から学んだことの意味や価値を自覚することができるのではないかと考える。

6 単元展開 災害時の諸問題を地域における自己の生き方との関わりで捉える学習

全18時間扱い　本時は第12時

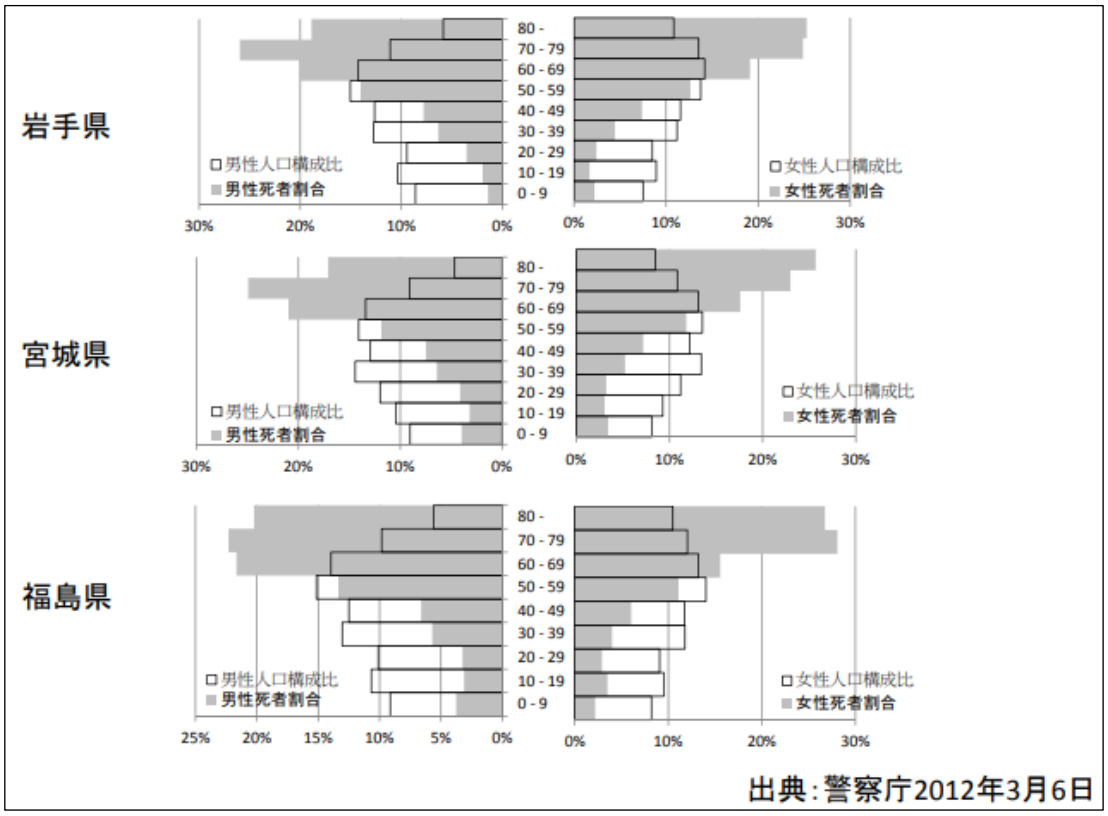
段階	◆学習 教師の指導・支援	予想される生徒の反応	評価の観点	時間
導入	◆『災害に負けないまち』の実現を目指して追究を進めるという見通しをもつ。 ・台風19号などの被害の様子を取り上げ、避難情報が出た時に自分ならどのように行動するかを尋ねる。 ・避難所の様子や避難所を運営する訓練の様子を取り上げる。 ・避難所で起きる問題を取り上げ、避難所運営の立場として、自分ならどのように判断するかを考えるように促す。 ・災害復興対策企画委員会の方の講演会を設ける。 ・エのような考えを取り上げ、**単元の目標「誰もが安心して避難や避難所生活ができる『災害に負けないまち』の実現に向けて調査し、地域へ発信しよう。」**を設定する。	ア　災害時に避難所に避難する人もいれば、家に留まっていた人もいるようだ。同じ避難情報を聞いても人によって意識の差があることが分かる。 イ　台風19号の際の避難所の様子を見ると、食事や睡眠などにおける不安が多そうだ。 ウ　ある問題を、班で考えてみたが、人によって判断基準が異なり、一つの判断をするだけでも大変だった。現場を経験した人はさらにどのような大変さがあるのだろうか。 エ　講演の中で、実際に「災害に負けないまち」をつくることが大切と言っていた。どうすれば誰もが安心して避難をしたり、避難所生活をしたりすることができるまちをつくることができるかを考え、地域に発信したい。 オ　災害に備えて、地域のつながりを深めていくことが大切だ。そのためにも、地域にはどのような人がいて、避難所に避難してくるのかを知る必要があるのではないか。 カ　避難や避難所生活をする上でどのような危険や不安があるかを知ることも必要だと思う。	知①（ワークシート）	1～3
展開	◆避難所運営シミュレーションの振り返りや過去の資料の分析から課題を見いだす。 ・避難所運営シミュレーションを行い、活動を振り返る場を設ける。 ・過去の災害の資料から、どのようなことが考えられるかを分析するように促す。 ・どのような方法で情報を収集するかを考えるように促す。	キ　避難者が抱える不安を考えて配置することが大切だと感じた。避難者について知らないことが多く、配置に困ることもあったので、その人についてもっと知りたい。 ク　高齢者や障害者は体の不自由さが原因で逃げ遅れると思う。災害時要支援者のことやサポートの仕方について知ることがこの現状を変えていく一歩かもしれない。 ケ　課題を「『対象者』は、災害時に、どのようなことに困ったり、不安を感じたりするのか調査しよう。」としよう。 コ　盲学校の先生への調査、疑似体験、インターネットを利用して情報を収集しよう。	知①（観察） 思①（ワークシート） 態①（観察）	4～6
	◆収集した情報を種類ごとに整理・分析し、災害時要支援者の不安や不自由さを捉える。 ・計画に沿って情報を収集する場を設ける。	サ　目隠しをして歩いてみると、どれくらい先に段差があるかを誘導者に伝えてもらわないと不安で怖かった。 シ　目隠しをして、便座に座り、水を流してみた。どこにレバーがあるか知っていればよいが、避難所では、場所が分からないため、トイレで困ることが多いと思う。 ス　盲学校の先生に聞いてみると、やはり点字ブロックがないと移動に不自由さを感じるようだ。だから誘導時には、半歩前に立って、肘に掴まってもらうとよいらしい。 セ　盲導犬が避難所に入れるのかという不安があるようだ。また、入れたとしても他の避難者はどう感じるのか気になるようだ。他の避難者に理解してもらうことも必要だ。 ソ　周囲の情報が入らず、適切な判断につながらなかったり、被害状況が分からず、移動することが困難だったりすると自治体のサイトに載っていた。 タ　私たちが、単元の初めに避難所を見て感じたこと以上に、「視覚障害者」の方々は、避難時や避難所生活時において困ることがあることが分かる。	技②（観察） 思②（観察・ワークシート）	7～9

	・収集した情報を付箋に記入し、種類ごとに分類するように促す。 ・社会福祉協議会の職員からのメッセージを視聴する場を設ける。	チ　対象者が困ることへの対策がなされているものもあればそうでないものもあることが分かる。 ツ　「視覚障害者」が安心して避難や避難所生活ができるように、これまで調査した内容を回覧板を通して、地域に発信していきたい。		思③（観察）	10～11
展開	◆「目的」に沿った発信内容を検討し、今後の取組の見通しをもつ。 ・ツのような振り返りを発表するよう促し、発信に向けた思いを全体で共有する。 ・テのような意見を取り上げ、**「整理した情報を基に、『目的』に沿った発信内容を検討しよう。」**と本時の目標を共有する。 ・発信内容を決め出す際に、どのようなことを考えながら検討したかを振り返るように促す。	テ　とてもたくさんの情報があるため、どのような内容を発信するか悩むが、安心、安全な避難や避難所生活の実現に必要な情報は何かを考えて検討したい。 ト　掲載する用紙の大きさは決まっているため、そこに載せる情報量にも限りがある。だから、情報に優先順位を付けて考えていけばよいのではないだろうか。 ナ　「視覚障害者」は倒壊した塀や道路の亀裂に気付けないことがあると聞いた。安全な避難のために、誘導や声掛けの仕方を知ってもらうべきだと思う。誘導の仕方に関わらせて、避難時に困ることを載せることで、読み手に避難時の状況を想像しやすくしよう。 ニ　次に、「視覚障害者」の防災意識を高めていくために、一般的な防災倉庫の情報とともに、白杖や音声時計、ラジオ等を身近な場所に置くことを伝えよう。 ヌ　目的を確認した上で、情報に優先順位を付けたり、情報を分類したりすることで決め出すことができた。 ネ　一人でも多くの人が「視覚障害者」にサポートができるように、地域住民に向けて、適切な誘導方法や声掛けの仕方を発信していきたい。	5分 35分 10分	思①（ワークシート） 態①（観察）	12（本時）
	◆検討シートに沿って情報を選択し、発信内容をまとめる。 ・課題に必要な情報を収集し、資料を作成する場を設ける。	ノ　ある自治体のホームページに「視覚障害者」の誘導に関する資料が載っていた。文章では伝わりにくいため、絵や図を使って、危険や不安を軽減できる方法を示そう。 ハ　避難所では、トイレまでの動線に点字ブロックがないことが多いため、生活場所はトイレから近い所にすることや食事の支給時には地域で係などを決めて、直接渡すとよいことも避難所での配慮点に入れておこう。		思③④（ワークシート） 態③（観察）	13～15
	・情報を収集した方に資料を見てもらい、頂いたアドバイスを基に、内容を再検討する場を設ける。	ヒ　視覚障害の程度は様々であることを載せると、地域の方の理解を深めることができるとアドバイスを頂いたので、障害の程度に合ったサポートの仕方について発信しよう。 フ　この内容が地域に発信され、一人でも多くの人に見てもらえることで、誰かの役に立つことができたら嬉しい。		思④（観察） 態②（観察）	16
終末	◆学習を振り返り、地域における自己の生き方を考え、学んだことや取組のよさを明確にする。 ・再度避難所運営シミュレーションを行う。 ・学習した内容を振り返り、「これからの自分」という視点で考えをまとめたり、単元を通して、課題を更新してきたことについて、どのような活動や考え方が役立ったのかを振り返ったりする場を設ける。	ヘ　対象者の状況や避難所の様子が以前よりイメージできるため、他の対象者を追究してきた人と意見がぶつかることもあり、改めて避難所運営の難しさを感じた。 ホ　自分の地域のことをもっと知り、避難時や避難所生活時には、誰一人として取り残さない、災害に負けないまちをつくりたい。また、災害時以外でもいざという時には積極的に地域の人に関わっていけるような人になりたい。 マ　対象者や関係者に直接インタビューをしたことで、対象者を一つのまとまりとして考えるのではなく、一人一人状況が異なる存在として捉えるという考え方が大切だと思った。そうすることで、地域の人をイメージしやすくなり、対策やサポートの仕方も具体的に考えることができた。		知②（ワークシート） 態③（ワークシート）	17～18

Ⅳ　資料

資料１：東日本大震災における災害時要支援者避難の実態

・各県の人口ピラミッドと性別・年齢別の死者割合



・全体死亡率と障害者死亡率（岩手県、宮城県、福島県の合計）

県	全体			障害者手帳交付者		
	人口	死者	割合	人口	死者	割合
全体	1,674,185	18,829	1.1%	86,503	1,658	1.9%

出典：ＮＨＫ　ＥＴＶ「福祉ネットワーク」および「ハートネット」取材班の調べ

資料２：各対象者を追究する班の予想される「調査方法」、「調査内容」、「発信内容」（例）

	調査方法（社会福祉協議会と連携）	調査内容（模造紙に書かれると思われる内容）				調査内容を基にした発信内容
		①避難時に困ること	②避難所生活時に困ること	③対策	④その他	
視覚障害者	・疑似体験 ・盲学校 ・インターネット	・文字による情報を得ることが困難。 ・避難場所まで行くのに時間がかかる。 ・道の亀裂やがれきに気付くことが難しく、つまずいてしまう。	・時計や掲示板情報が読み取りにくい。 ・トイレへの移動や利用が困難。 ・段差が見えず段ボールベッドが怖い。 ・盲導犬の居場所はどうなるか。	・誘導する際は半歩前に立って歩き、声掛けする。 ・携帯用点字ブロックを導入する。 ・避難所での生活場所は多目的トイレに近い場所にしている。	・視覚障害の種類。 ・視覚障害であっても普段行く場所であれば、買い物もできる。 ・盲導犬にやってはいけないことについて。 ・視覚障害者の日常生活。	・地域住民に向けた、避難時における視覚障害者のサポートの仕方。 ・災害時の備えや複数の避難ルートの確認と災害時要支援者名簿への登録のお願い。
聴覚障害者	・疑似体験 ・聾学校 ・インターネット	・避難に関する音声情報が聞き取りにくい。 ・避難中の指示を聞き逃してしまう可能性がある。	・食事や安否情報など音声による情報が聞き取りにくい。 ・音声が聞き取りにくいことを見た目では理解してもらえず、うまく他者とコミュニケーションをとることができない。	・障害の程度や筆談の必要があるのかを受付で申告してもらうようにしている。 ・掲示板を活用して、水や食事などの配給の時間や場所について載せておく。 ・筆談用の紙とペンを準備する。	・聞こえないことが分からないので、声を掛けられても「知らん顔をしている」と誤解されトラブルになった。 ・聾学校では、鏡を設置し、曲がり角で人がぶつからないように工夫をしている。	・聴覚障害に対する理解と障害の程度について。 ・災害時に知っておくと便利な手話。 ・音声を文字に変換する機能のある端末の準備の呼び掛け。
乳幼児・妊産婦	・妊婦体験 ・産婦人科 ・家族 ・インターネット	・お腹で足元が見えにくい。 ・動きにくく、転倒の不安がある。 ・乳幼児を抱えていると、両手がふさがる。 ・調乳などに関わる道具を運び出すことが大変。	・哺乳瓶の消毒はどうしたらよいか。 ・夜泣きで他の人に迷惑がかかるのではないか。 ・避難所で支給される食事で栄養は十分摂ることができるのか。	・授乳室を設置する。 ・塩分濃度の高い物は残すように伝える。 ・赤ちゃんの体温を維持するため新聞や布団などで体を包む。	・妊産婦さんに必要な栄養や食べ物。 ・妊婦さんに起きる体の問題（歯周病、貧血など） ・避難所で赤ちゃんの泣き声がうるさいと言われてしまう問題。	・避難時における妊産婦・乳幼児のサポートの仕方。 ・避難所でもできる調乳の工夫。 ・妊産婦に必要な栄養について。 ・授乳室、子供の遊べる場所の確保のお願い。
高齢者	・車いす体験 ・高齢者福祉施設 ・家族 ・インターネット	・運動機能の低下によって避難が遅れてしまう。 ・車いすに乗っていると、家から出るのも大変。 ・認知症などがあると、一緒に避難してくれる人がいるか心配。	・免疫力の低下によって感染症にかかりやすい。 ・一人になることで不安、混乱、不眠などになる。 ・動かないことによる運動不足やエコノミークラス症候群の発症のおそれ。	・音は聞こえているが理解に時間がかかるため、ゆっくり話す。 ・優先的に食料を受け取れるようにしている。 ・エコノミークラス症候群予防の体操。	・誤嚥性肺炎、脱水、低栄養などが起きて、災害関連死へとつながってしまう。 ・独居老人に対する支援が行われず、被害にあってしまうことがあった。	・高齢者、車いす体験を行ってみての困難さと介助の仕方について。 ・スロープがなくてもバリアフリーを作れる方法。 ・エコノミークラス症候群予防の運動。
外国人	・多文化共生相談センター ・JICA ・インターネット	・言語が異なることにより、避難情報や指示の内容を理解することが困難。 ・近所付き合いが少なく、避難所までのルートが分からない。 ・災害用語には専門的なものが多く理解が困難。	・自分の状態を日本語で伝えることが大変。 ・避難所の食事が宗教による制限に対応しているのかが心配。 ・避難所での他の人とのコミュニケーションが取れるのかが心配。	・多言語会話カードを作成している。 ・宗教による食事制限に関するアンケートを実施している。 ・宗教による食事制限を考慮した食事作り訓練の実施。	・宗教や食事の習慣の違いによる、避難所での食べ物の問題。 ・日本に住んでいる外国人の割合は、中国人が多い。 ・災害や避難所自体のことが分からず、避難所に避難できない。	・避難所において必要な会話に関する情報の提供や会話カードの例。 ・宗教による食事の制限にはどのようなものがあるかの情報とそれに対応した避難所で提供できる食事内容。

資料３：信州大学教育学部附属長野中学校　総合的な学習の時間３年間の構想

自己を振り返る　→　他者から学ぶ　→　社会と関わる　→　社会で生きる　→　未来を見つめる

	１学年	２学年	３学年
4 5 6 7	○総合的な学習の時間ガイダンス ・過去の先輩の姿から、３年間の総合的な学習の時間の目標や１学年のテーマを確認する。 「関心のある社会問題を調査しよう」 ○課題の設定 ・現代的な諸問題から関心のある問題を選択して課題とする。 ○情報の収集／整理・分析 ・どのような方法で情報が収集できそうか考える。 ※中学校では一人でも探究のサイクルを回すことができるようになることを目標にする。 ＜探究のサイクル＞ 「課題の設定」　→　「情報の収集」 ↑　↓ 「まとめ・表現」←　「整理・分析」 ☆友の追究の仕方（調査の仕方、整理の仕方、まとめ方等）で参考になったものを取り上げ、そのメリット・デメリット、効果等を全体で共有していく中で、追究の仕方を学ぶ。 ○まとめ・表現（学級、学年発表会） ・友のアドバイス等を参考にしながら、自身の発表内容を振り返り、改善していく。 ○講演会①（　　） ・社会問題に対して具体的な取組をされている方の講演会を設定する。 ○課題の設定 ・まとめ・表現を通して新たな課題を設定する。 ○グルーピング ・生徒の課題を「貧困」、「環境」、「平和」、「福祉」、「技術」等のグループに分ける。 ○活動の見通し ・グループごと、ヒューマン・ウィークの中でどのような方法で情報を収集するか決め出す。 ＜ヒューマン・ウィーク＞ ○課題に合わせた「情報の収集」を行う。 ○「整理・分析」を行い、前回のポスターによるまとめを参考にスライドを作成する。 ○学年内の発表会を行う。「まとめ・表現」	○総合的な学習の時間ガイダンス ・過去の先輩の姿から、学年のテーマを確認する。 「14 歳の問い」～社会で働く人～ ○課題の設定 ・私の啓発録を基に考える。 ○情報の収集 ・プロフェッショナル仕事の流儀を視聴する。 学級での視聴、希望による視聴など工夫する。 ・講演会① 中小企業家同友会常務理事　小林敬二　さん ○先行体験に向けて、どのような視点で体験をしたり、質問をしたりしたいかを考える。（見通し） 先行体験 ○整理・分析 ・先行体験に行く前と後の課題に対する自分の考えを比較する。 ○まとめ・表現 ・先行体験での体験を基に、各クラスやクラスを横断したグループで先行体験から得たことを語り合う。 ○課題の設定 ・学年内の発表会を終え、課題を見直す。 ・事業所へ事前に伝える。 ・ヒューマン・ウィークで自分の課題を追究するための見通しや計画を立てる。 ○情報の収集 ・講演会②　協栄電気興業(株)　松本克幸　さん ○生徒による電話連絡や事業所ごとの打ち合わせ ＜ヒューマン・ウィーク＞ ○社会体験学習（２日間） ○社会体験学習のまとめ（スライド） ○企業の方を招いたワークショップ ・Ｈ・Ｗのまとめの発表や座談会	○総合的な学習の時間ガイダンス ・過去の先輩の姿から、学年のテーマを確認する。 「私ができる『身近な社会貢献活動』」 ○課題の設定 ・これまでの学習を振り返り、根拠を明確にして現時点での理想の生き方を考える。 ・理想の生き方に近付くための実践を考える。 ○情報の収集 ・課題に関わる内容の情報を収集する。 ・実践①に向けて、準備を進める。 ・どのような目的で、実践①に臨むのか、他者からどのような観点で評価を受けたいのか、何を感じてきたいのか収集の視点を明確にする。 実践① ○整理・分析 ・実践①を通して、成果と課題を整理する。 ○まとめ・表現 ・実践①について、友と共有する。 ○課題の設定 ・「目的」、「内容」、「方法」の面で追究内容を見直し、今後のヒューマン・ウィークまでの実践の見通しを立てる。 ・実践する内容によっては、企業や地域の協力が必要となるため、個人で連絡をするなどして、運営面も各自で行う。 ○情報の収集 ・どのような視点で実践②を行い、情報を収集するかを明確にする。 ＜ヒューマン・ウィーク＞ ○実践② ・各自の計画に沿って実践を行う。（３日間） ○整理・分析 ・３日間で収集した情報を整理・分析する。
8 9 10 11 12	「災害を知る、自分の命を守る」 ○自分の命について考える。 ・命が大切だと感じた経験を語り合う。 ・命の危機などの体験を紹介し合う。 ※道徳「ひまわり」の学習をする。 ○災害について知る。 ・過去に起きた大きな災害について知る。 ○課題の設定 ・災害時に自分の命を守るにはどうしたらよいか考える。 ○情報の収集、整理・分析 ・災害時に命を守る方法を知る。 ○ダイレクトロード ○災害時のマイタイムラインを作成する。 ・ハザードマップを基に自分の地域で災害が起こった際にとるべき行動について考える。	「私たちが考える『災害に負けないまち』」 ○講演会　災害復興対策企画委員会 柳見澤　宏　さん ○課題の設定 ・対象者は、避難時や避難所生活において、どのような不安や不自由さをもっているか。 ○情報の収集、整理・分析 ・疑似体験、インタビュー、インターネット等で情報を収集し、分類する。 ○まとめ・表現 ・各班の調査内容を共有する。 ・まちづくりに必要な活動を考える。 ○課題の設定 ・整理した情報を基に、「目的」に沿った発信内容を検討する。 ○情報の収集、整理・分析 ・発信に向けた資料を作成する。 ○社会福祉協議会、南堀地区に発信する。 ・回覧板への掲載、ＨＰ、事例の発表など	○まとめ・表現 ・学級内、学年内の発表会等を行い、友のアドバイスを基に修正を重ねていく。 ○単元終末 ・学習発表会や座談会において、全校、他学年に発表する。 「私へのメッセージ」 ○中学校での追究を振り返り、自分の生き方についてまとめる。 ○三年間の学習を振り返り、「自分の生き方」についてまとめる。 ○まとめてきたワークシートを見返しながら「まとめ・表現」の仕方を考える。 ○自分は将来何を目指すのか、学んできた現状の中でこれからすべきことは何か、どのような大人になりたいかをまとめて発表する。
1 2 3	「14 歳の問い」～啓発録から学ぶ～ ○課題の設定 ・14 歳という節目において、過去の偉人や現在第一線で活躍している人、地域で働く人の生き方や考え方に触れ、自分の大切にしたい生き方を考えていくことを課題とする。 ○情報の収集／整理・分析 ・共感できる点やそうでない点等に色分けし、その根拠を示す。 ・共感できる点を順位付けする等。 ○まとめ・表現 ・私の啓発録の作成	誰もが平和に暮らせる社会に向けて ○課題の設定 ・世界の格差、貧困、戦争、差別等に目を向け、追究テーマを決める。 ○情報の収集／整理・分析 ・収集した情報と道徳等と関連させながら考える。 ・講演会 世界中の様々な問題に対して取り組んでいる方の資料を扱ったり、講演会を行ったりする。 ○まとめ・表現 ・私の考える平和な社会についてまとめ、共有する。	＜発表の場として考えられるもの＞ ○自分たちで学年内の発表会を企画し、実施する。 ○後輩へ向けた発表を行う。 ○冊子にまとめる。（データ化、文集等） ○信州 ESD コンソーシアム成果発表＆交流会へ参加する。（１月下旬～２月上旬）　など